

加東市公共施設適正配置計画（案）における、東条文化会館取り壊し計画について

私、保科洋（Hoshina Music Office 代表）は、加東市内に32年間居住しております音楽家（作曲家、指揮者）です。定年前までは、兵庫教育大学で教鞭をとらせていただいておりました。この加東市で生活し、地元の皆様と交流しながら音楽活動を続けてまいりました人間の一人として、加東市公共施設適正配置計画（案）内の、東条文化会館の取り壊し議論に大変憂慮しております。以下の通り、この件についての私の意見を述べさせていただきます。

なにとぞ、皆様の慎重な議論をお願い致します。

1) 周辺地域も含め未来を見据えた、より深い議論を提案します。

私は、東条文化会館とやしろ国際学習塾の両方に、当時の東条町、社町から要請を受け、企画段階から関わりました（滝野文化会館の建設には関わっておりませんので、ここで意見を述べることは控えさせて頂きます）。

ホールというのは、いくら企画時に設計を重ねても、出来てみなければ分からぬ部分もあります。しかし、結果として、東条文化会館は大変すばらしい音響という特徴が生まれ、やしろ国際学習塾には舞台と客席の距離が近く、アットホームで、市民の皆様に親しみやすいホールという特徴が生まれました。

やしろ国際学習塾は、観客との距離感が大事なトークイベントや演劇、参加者体験型イベントなど、市民の皆様が気軽に使い、交流できるホールとして最適ですし、東条文化会館は、音響を重視する音楽イベントや、大掛かりな舞台背景を使う演劇、バレエなどの演目に最適です。

この二つが両車輪としてどちらも十分に機能することで、地域の皆様の文化に触れる機会は豊かになります。
しかし、これらのうちどちらか1館を廃館にすれば、どちらを残しても車輪の片方が足りないことになり、市民の皆様に提供できる文化的体験やその満足度は偏るでしょう。

文化施設が片輪を欠き、文化的体験や満足度が偏った結果、「どうせなら少し足を伸ばして都会まで出て、○○市の○○ホールで観賞した方が…」という意見が主流になってしまえば、もはや残したホールの維持も難しくなり、結果的に文化活動が衰退してしまうのではないか、と私は危惧します。

たとえそうなっても、若い方々は都会へ足を運び、自分からそのような文化活動に触れる機会を求めることができるかもしれません。

しかし、自力ではなかなか都会へゆけない子供達や、遠方への外出が難しいご年配の皆様にとって、地域での文化活動の衰退は、そのまま文化的な体験の減少に繋がってしまいます。

私が文化施設を守りたいと思う理由は、やはり地元で豊かな文化的体験に触れることができる、という環境が、結果的に地域の皆様の満足度につながり、更に地域の発展につながると信じるからです。

現在取り壊しが検討されている東条文化会館は、世界の演奏家の厳しい要求に十分に応えることができる、地方自治体のホールとしては非常に恵まれたホールです。

コスミック・ホールは、どんな自治体でも簡単に手にいれることが出来るホールではなく、すくなくとも音響効果の面では、既に近隣自治体から一步も二歩も抜きん出た存在であり、25年かけてそれを支える人々の層が熟成されてきた、という視点も、現在の議論には欠けているように思います。

この問題は、今後、加東市がどのような文化活動を行っていくのか、という方針にも直結します。それによって、この先加東市にどのようなホールが必要になるかも変わるでしょう。

その将来の展望も含め、是非総合的な議論がなされるよう、希望します。

2) 日本木管コンクールの開催ホールに関する意見

日本木管コンクールは、東条文化会館の「コスミック・ホール」で毎年行われ、2014年には25周年を数えました。私は、このホールの設計思想に関わりましたが、その際數十年にわたって地元の皆様に愛されるホールでありつづけることを願い、以下のような提言を致しました。

「地方のホールは、作るのはまだ簡単だが、維持していくことは大変難しい。周辺地域にもアピールし、市内だけでなく市外からも広くお客様を呼べるようなホールにするための一案として、

- 1) コスミック・ホールを響きの良い、音楽用コンサートホールとして設計し、
- 2) そこで国際木管（フルート、クラリネット）コンクールを毎年行ってはどうか？」

そして、これらを成功させるため、当時の日本フルート協会会長吉田雅夫氏、日本クラリネット協会会長大橋幸夫氏など、日本のトップレベルの演奏家の方々に審査をお願いしました。

審査員の方々、そして地元の皆様の熱い応援が奏功し、やがてコスミック・ホールの舞台で演奏されたコンテスト（コンクール応募者）や、演奏家の皆様の、「コスミック・ホールは音響が素晴らしい」という評判に支えられ、

- 3) 通常地方では招聘が難しい国際レベルの演奏家がコスミック・ホールに来演して下さるようになり、
- 4) その結果地域や近隣の市民の皆様が、都会まで足を運ばなくとも世界レベルの素晴らしい音楽に接することが出来る

という成果を上げて参りました。そしてついには、日本木管コンクールは、若手演奏家の登竜門として国内外に知られるコンクールに成長致しました。

私は、コスミック・ホールがなくなってしまった場合、他のホールでは、現在のようなコンクールの開催効果は見込めないのでないか、という危惧を感じております。

たとえば、フルートでいえば、びわ湖国際フルートコンクール（ガリバーホール）、神戸国際フルートコンクール（神戸文化ホール）、三田ユネスコ・フルートコンクール（郷の音ホール）と、近畿圏内に他に3つのフルートコンクールが存在します。いずれも大変音響の良いホールを使っており、ホールの音響について、コンテストの皆様にこれらのホールと同等の印象を与えようとすれば、コスミック・ホールに匹敵する音響が要求されると思います。

クラリネットコンクールについては、昨年第2回を横須賀芸術劇場で開催したジャック・ランスロ国際クラリネットコンクールがあります。まだ2回目、更に1回ごとにフランスと日本で行う、ということで、次回も横須賀芸術劇場で行われるものか分かりませんが、入賞者披露コンサートをサントリー・ホール（ブルーローズ）で行うなど、コンテストにとって魅力的な環境を整えている模様です。

以上に挙げたコンクールは、いずれもこれまでに20回、8回、4回、2回のコンクールを行っています。音楽コンクールの世界では、「コンクールの歴史がある」ということも、コンテストが参加を決める要因となり得ますので、その意味では（1985年に第1回が開催された神戸国際フルートコンクールを除き）日本木管コンクールに一日の長があります。

しかし、コンテストの時間は有限ですから、これほど競合コンクールが増えて参りますと、僅かな要因でコンテストが他のコンクールに流れる可能性も出てきます。

コンクール主宰側から、コンテストに対してアピール出来るポイントは、ホールの音響の他にも、聴衆賞などがあります。

聴衆賞は、たとえミスなどで上位入賞を逃しても、表現力などで突出した才能を持つ演奏家が広く認められるための賞です。このため、聴衆賞を獲得した奏者がその後プロとして活躍出来ているか否かが、コンテストにとって、そのコンクールに参加するか否かの判断のひとつになります。

日本木管コンクールで言えば、聴衆の皆様も一流の音楽に長年親しみ続けた結果、聴衆賞である「コスマス賞」の受賞者が、たとえ1位を受賞できなくともプロの演奏家としてはたくことが出来る、という事例を作っていました。

これは、ホールを支えて来た聴衆の皆様の耳が「肥えて」いなければ難しいことです。
つまりこれは、コスミック・ホールとその開催イベントは、地域の文化レベルの向上に貢献してきたことの証と言えるのではないでしょうか。

しかし、聴衆賞は、音楽の専門家ではない人々が選ぶという性質上、客席によって聞こえ方にはらつきの大きいホールでは、うまく機能しないという一面があります。

また、技術力よりも表現力を重視しますから、奏者の表現する細かなニュアンスが、繊細に、くっきりと、ホールの隅々まで伝わる必要があります。

その意味で、ホールの音響に助けられるところがかなり大きい賞であると言えます。

コスミック・ホールという音響の素晴らしい会場が失われた結果、コンテストが以前ほど日本木管コンクールに魅力を感じなくなり、有能なコンテストが他のコンクールに流出する、という未来は十分にあり得る、と私は考えています。もしもそうなった場合、日本木管コンクールは、現在の評価「若手の登竜門」という大切なセールスポイントを失い、結果、コンクールを続けていくことも難しくなるかも知れません。

以上はあくまで私の意見にすぎません。しかし、日本木管コンクールの今後については、安易にホールを移せばよい、という議論に留まらず、より広く有識者の意見を募り、多角的に検討することを提案します。

3) 文化事業に対する私達の意見

私は、将来を担う子供達のために、出来るだけ良質な音楽体験を提供したい、という思いから、これまで4年の間、加東市の「音楽の日」というイベントに参加させていただいて参りました。

戦後の長い平和も、昨今の世界情勢の不安定化や経済不調を受け、世の中は年々殺伐とした空気の度合いが増しています。

そんな時代だからこそ、時代を担う子供達には、美しいもの、豊かなものを沢山体験してもらって、この先に訪れるかもしれない混沌の時代にも光を見失わないで欲しい、と切に願います。

それゆえ、私は、「効率の悪い文化施設は廃止しよう」という方針そのものに、賛同することが出来ません。美しいもの、感動、豊かなものとは、しばしば「採算」や「効率」とは対極にあります。一見無駄とみえた文化の種が、数年後、数十年後に花開くこともあります。何が無駄で、何が効率良いのか、答えは「採算」や「効率」で計れる時間には、容易に明らかにはならない、と信じるからです。

現実問題としては、採算や効率を度外視は出来ないかもしれません。しかし、それよりまず先に「未来をどのようにしたいのか」という視点があり、その未来図に共感した人々からのサポートを得て文化施設が運営される、という形にならなければ、いずれにしても文化施設を運営していくことは困難になる、と私は考えています。

しかし、そうはいっても、加東市の予算状況が大変苦しいことも分かっております。「文化が大切だというのなら、まず自分でなんとかしてみろ」という市民の皆様の声ももっともなことです。

そこで、市民の皆様に「やはり音楽は素晴らしい」と思っていただけるよう、そしてこの議論が現在の資金難の解消という視点にとどまらず、未来の発展をも見据えた議論となるように願いを込めて、今後は音楽の日も含め、可能な限りボランティアの形で加東市の文化活動に参加させて頂きたいと思います。

本来、プロとしては、自分の仕事を極度にディスカウントするようなことがあってはなりません（それは、その分野で活動しようとする若い方々の生活を妨害することになりますから……）。

しかし、今は敢えて、私の決意をこのような行動として、皆様にお伝えしたいと思います。

どうか、市議、市職員、市民の皆様には、ホールの統廃合につきましては慎重に議論を尽くし、有識者の意見も広く募って総合的な判断をしてくださるよう、お願い致します。

Hoshina Music Office 代表
保科 洋